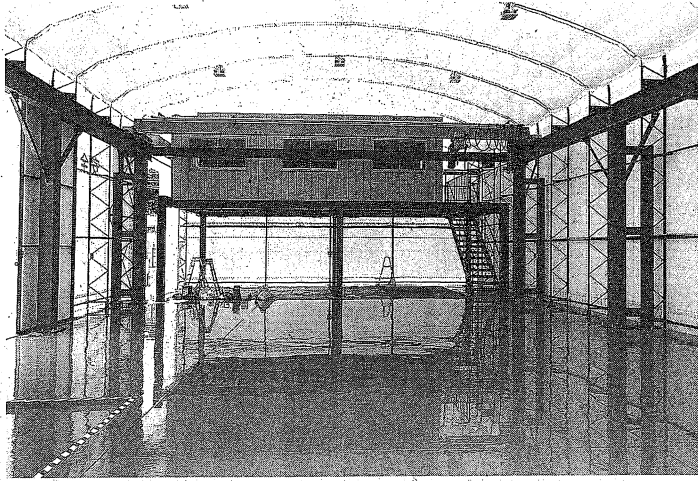


大和合金が倉庫増設

画像検査で工程省力化も

特殊銅合金メーカーの大和合金(本社■東京都板橋区、萩野源次郎社長)は、今月下旬をめぐりに倉庫を増設する。今後の航空機や半導体関連需要の回復に伴う受注増を見据えた対応で、建屋建設に数千万円を投じる。作業効率化のため2トンを備えるほか、画像検査装置を置くことで検査作業の半自動化を進める予定。萩野社長は「機械であれば作業者によって検査結果にばらつきが生じず、省力化を進められる」と話す。

航空・半導体需要増に対応



倉庫内には事務所とクレーンを備える

同社は生産性向上を目的に3年前からレイアウトの最適化を進めており、これまで加工設備などを集約。2021年には機械加工場の移転拡張に伴い航空機向けフッティング材料用のテント倉庫を設けた。今回増設する「第一倉庫」もその二環で、加工工程の近くに検査設備を置くことで生産効率を高めた。考えだ。庫内には同社初の試みとして検査結果の取りまとめなどを行う事務所を中二階部分に設け、作業者の利便性

向上を図る。今後は検査工程の自動化や設備の集約化な

どで高めた生産性を生かして、仕事の付加価値向上を目指す考え。江口逸夫工場長は「効率化で生まれたゆとりを生かし、社員には新しい仕事に取り組んでほしい」と期待を寄せ、安全性も一層高め、

「よりの安心できる工場づくりを目指す」(萩野社長)。

今年度の銅合金素材の販売量は、航空機関連が前年比で1割伸び、過去最高量になると見通す。新型コロナ禍か

ら需要回復が本格化するため、足元でも欧州の新造機向けの販売が堅調。ベトナムやインドネシアの新規需要も増えるほか、国内も整備用向けの需要が復調するとみる。半導体関連も、AIや車の自動運転化向けのニーズの高まりなどで回復が見込まれる。萩野社長は「すでに昨年末から半導体向け需要が底を打っているユーザーもある」と話す。